



フェイド・アウト

1月19日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月19日のおはなし「フェイド・アウト」

君はぶらぶらと散歩に出かける。特にあてもなくちょっとその辺を歩き回るつもりで。しなければならないことは片付けたし、やり残したこともこれとってない。朝まだ早めの明るい水色の空にぷかぷか浮かんだ雲たちが、眠そうな朝日に照らされてふちだけ白く輝かせている。空気は冷たく澄んでいる。いろいろな鳥が元気よく鳴き交わしている。聞いただけで何の鳥かわかれば楽しいだろうになあと君は思う。カイツブリでないことだけは確かだな、などととりとめもなく考えてから、ふと君は何かを感じて立ち止まる。

何かを。

かすかな気配。それはちょうど香りのようなものと言えるかもしれない。さっきまでその場にいた女性の香水。女は立ち去って、もうそこにはいない。でも香りがまだ漂っている。いま君が初めてその場にやってきたとしたら、その香りに気づかないかもしれない。気づかないかもしれないが、それでも何かの気配を感じて、ふと立ち止まるかもしれない。

言い換えればそれは亡霊のようなものと言ってもいい。既に死んで、もうこの世にはいなくなっているのだけれど、まだ何かがそこに留まっている。もっとも、なにしろ本体はもうないのだから見ることも触ることもできない。でも確実にそこには何かを感じてしまう。誰かがここにいる、もしくはつい最近までいたんだと感じる。

それは耳鳴りのようなものと言ってもいい。
あるいは目覚める直前に耳元で聞いたささやき。
ふとよみがえる口づけの味。
肌をたどる掌の感触。
よく知っていたはずなのに思い出せない人の顔。

君は街角で立ち止まり、よく知っているはずの景色を、初めて訪れる場所のように眺める。そして思う。もう終わっているのだけれど、その気配が、あるいは影響がまだそこにある、と。それから自問する。終わっている、だって？ 何が？ でも自分でもその問いに答えることはできない。だから君はその場を離れ、またそぞろ歩きを始める。

ふと見上げた先の窓を見て、空き家なのかなと思う。でも奥に家具の陰を見て取り、空き家ではない、誰か住んでいるのだと思い直す。どうして空き家だと思ったのだろうかと思うけれど、すぐに先に行ってしまう。駅近くの建物に開いた開口部を見て、ある店の情景を思い描く。その階段をとんとんと下りて行く先にカフェがあるはずだ。けれど実際にはそんな店に入った記憶はない。

駅を眺め、その駅のホームで傘を探したことがあったような気がするが、そんなとりとめもないことを覚えているのがおかしい。あるいは人違いされたんだっただけか。少し歩くと古びた洋風建築の家の門に緑青をふいた看板が出ていて、そこがかつて何かの研究所だったことをうかがわせる。そうそうここの博士、新しい研究を発表していて何かとんでもない災厄を引き起こしたんじゃないか。でもそれが何なのか思い出すことはできない。

マジック好きの牧師さんで有名な教会の前を通り、映画館の前を通り過ぎる。リュック・ベッソンが日本人女性とコラボレートした作品のポスターがかかっている。公園にたどりつき、噴水を見ながら君は自分が小さい頃、母親がその噴水の中をばしゃばしゃと歩き回ったことがあるような気がする。でももちろんそんなわけはない。だって君はこの町で生まれ育ったわけではないのだから。

公園の奥には小さな動物公園があってそこは君のお気に入りの場所だ。いつも通りゾウガメのいる檻の前で立ち止まり、じっと動かないゾウガメをじっと立ち止まって見つめ続ける。いつか

こいつが何かを話し掛けてきそうな気がする。そう思うけれど、別に根拠があるわけじゃない。ゾウガメは黙って瞬きもせずじっとしているだけだし、よく見かける飼育係の姿もない。

公園内を縦横に走る散歩道を辿りながら ぶらぶらと池のほとりにたどりつきベンチに腰掛ける。池を見ているとそこから女神が出てきて「あなたが落としたのはこの軽い槍ですか？ 重い槍ですか？」と聞くんじゃないかと考えて君は心の中で微笑する。何を馬鹿なことを言っているんだ？ とりとめない思いは次々に浮かぶ。さようなら風博士。さようならスマトラタイガー。

それから不意に君は胸がいっぱいになる。喜びと悲しみと満足感とさびしさが押し寄せてきてどうすることもできなくなる。200もの夢の名残に包まれて君は公園の池のかたわらのベンチで身動きを取ることもできなくなる。そうして君は消えてしまう。誰にも気づかれずに。どこでもない街のどこでもない公園のどこでもない池のほとりのベンチで。

(「名残」 ordered by くー--san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

フェイド・アウト

<http://p.booklog.jp/book/42279>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42279>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42279>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.